

国立研究開発法人

国立がん研究センター中央病院

平成 29 年度外科病理レジデント募集

当センター病理部門では臓器担当制を採用し、専門性の高いスタッフによる病理診断が、臨床各科のレベルの高い診療に貢献しています。当センターの外科病理研修プログラムにより、各種臓器セクションをローテートすることで、多彩かつ豊富ながん症例を経験し、がん全般に関する高度な知識と病理診断能力を養うことができます。

平成 29 年度から開始される新専門医研修制度に合わせ、当センターを基幹施設とする研修プログラムを設けています。また、新専門医制度以前の卒業者を対象として、従来からの外科病理レジデントプログラムも継続し募集します。

なお本パンフレットは、従来型の外科病理レジデントプログラムの紹介であり、新専門医制度に則ったプログラムについては、当科あるいは病理学会ウェブサイトに掲載されているプログラムをご確認ください。



レジデント募集に関する問い合わせ先
国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科
〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1
TEL 03-3542-2511 内線 5753/FAX 03-5565-7029
masayosh(at)ncc.go.jp ※at は@に変換

■研修の目的■

病理専門医となるために必要な、病理解剖・病理診断学・細胞診断学を含めた病理診断の基礎知識とその実際を修得する。

■研修の内容■

全期間を通じて病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、乳腺、婦人科など）の外科病理セクションを一定期間毎にローテートし、生検診断、手術材料の切り出しと診断、細胞診、術中迅速診断に従事しながら病理診断能力を養います。また、診断に必要な免疫組織化学染色の理論と技術の習得を行います。この間、臨床各科とのカンファレンスを通じて、疾患の全体像の把握、治療に必要な病理情報の判断能力を養います。

希望があれば以下を行うこともできます。

- ・病理診断に応用可能な遺伝子解析などの技術の習得ならびに外科病理学的研究。
- ・病理診断に必要な臨床的知識の習得を目的とする関連臨床部門へのローテーション。

◆レジデント正規コース：期間3年

◆がん専門修練医(チーフレジデント)：期間2年

◆その他、短期レジデントコース(3ヶ月単位)、任意研修制度(期間任意、無給)もあります。



平成29年度レジデント・がん専門修練医募集関連イベント

- ・中央病院・東病院合同説明見学会：平成28年7月3日（日）（終了しました）
- ・中央病院オープンキャンパス：平成28年8月19日（金）
- ・夏期病理研修プログラム（1週間）：平成28年7月19～22日、25～29日、8月29日～9月2日

詳細は当院ホームページ(<http://www.ncc.go.jp>)をご覧ください。

病理科の見学は随時受け付けています。お気軽にお問合せ下さい。

- ・大学院在学中の方もご相談ください。社会人大学院入学制度もあります。

カリキュラムの実際 (新専門医制度プログラムとは別です)

◆レジデント正規コース：最初の2年間で概ね3ヶ月毎に各臓器をローテーション、最後の1年間は、重要臓器および興味ある臓器の再ローテーション、研究にあてます。関連臨床科をローテーションすることも可能です。



レジデント正規コースのカリキュラム(例)

1年目			2年目				3年目			
肝胆膵 (3M)	呼吸器 (4M)	消化管 (4M)	乳腺 (4M)	泌尿器 (3M)	婦人科・ 細胞診(3M)	骨軟部・ 脳神経(3M)	頭頸部(3M)	皮膚(3M)	婦人科(3M)	骨軟部(3M)
							血液(12M)			

◆がん専門修練医(チーフレジデント)：最初の1~1.5年間に各臓器をローテーション、残りの期間は、興味ある臓器の再ローテーション、研究にあてます。在籍期間中に病理専門医資格の取得を目指します。

各臓器ローテート期間には、各臓器担当病理医の指導のもとで切り出しを行い、検鏡、ディスカッションを経て病理診断報告書を作成します。臨床医との術前術後カンファレンスにも参加します。

在籍期間を通して、術中迅速診断、生検診断、剖検に参加します。当院の術中迅速診断は年間約2100件と極めて多く、病理専門医試験受験資格取得のための症例経験数(50件)を容易にクリアすることができます。また剖検については、施設内外での剖検研修により必要経験数(40件)の達成が可能となっています。

また、豊富な臨床検体を用いた研究や症例報告など国内外の学会発表や英文論文の執筆も活発に行われており、研修中にきめ細やかな指導医のサポートのもとで学術活動を実践することも可能です。

<レジデントの卒後の進路>

当センター、都立駒込病院、国立国際医療研究センター、防衛医科大学、中京病院、東京慈恵会医科大学、筑波大学、東京医療センター、札幌医科大学、広島大学、兵庫県立加古川病院、北海道大学、福岡大学、新潟大学、新潟市民病院、 他

<指導スタッフ>

平岡 伸介、関根 茂樹、元井 紀子、前島 亜希子、森 泰昌、渡邊 麗子、谷口 浩和、吉田 正行、吉田 朗彦、吉田 裕、助田 葵

※スタッフ、レジデントともに学閥に関係なく、様々な大学・施設出身者が集まっています。

■2015年の検体数

- ・生検標本診断: 19,660件 (うち術中迅速診断 2,102件、内視鏡 ESD 標本含む)
- ・手術標本診断: 4,060件
- ・細胞診断: 12,026件 (うち術中迅速診断 456件)
- ・剖検: 31件

■各部門の担当者より

1 消化管腫瘍部門

年間の手術例はおよそ、食道100例、胃350例、大腸300例。内視鏡ESD症例は、食道100例、胃400例、大腸200例と豊富で、多数例で肉眼および組織診断を勉強することができます。臨床各科とのカンファレンスが毎週行われており、臨床に直接対応した診断を身につけることができます。

2 肺・縦隔・胸膜腫瘍部門

年間約630例の切除標本と500例の生検標本を通じて、取扱い規約に掲載されている大部分の疾患を経験することができます。また、中皮腫や胸腺腫の症例も数多く経験することができます。

3 乳腺腫瘍部門

乳腺部門では年間600件前後の乳腺手術検体をはじめ、多数の針生検標本、切除生検標本の検鏡を通じて乳腺病理診断の研修を行います。乳腺外科・乳腺腫瘍内科・放射線診断科と定期的にカンファレンスを行っています。

4 婦人科腫瘍部門

婦人科部門では、子宮・付属器・腹膜・膣：外陰腫瘍などについて、新鮮標本の取扱いから診断、症例検討まで、豊富な腫瘍性疾患を対象に研修することができます。他院コンサルテーション等も含め、希少症例についても経験を積み学ぶことができます。婦人腫瘍科とのカンファレンスを通じて最新の治療体系と病理診断の位置づけを学び、臨床に直接対応した診断を身につけることが可能です。

5 泌尿器腫瘍部門

前立腺癌、膀胱・尿管・腎盂の尿路上皮癌、腎腫瘍、精巣腫瘍、副腎腫瘍、尿膜管癌、精巣腫瘍の後腹膜リンパ節郭清検体などの診断を多数経験できます。特に尿路上皮癌のTUR-Btや手術検体が豊富です。

6 肝胆膵腫瘍部門

肝・胆・膵領域腫瘍の豊富な手術検体(特に胆膵領域がん年間約150例)を一例一例、新鮮肉眼所見、迅速診断から最終報告まで丁寧に診断する過程を通して、その診断法を実践的に学ぶことができます。研究面では病理学的特異性や臨床病理学的意義に関して、遺伝子診断も交えて多数症例を用いた検討や意義深い症例の検討を行っています。

7 血液腫瘍部門

年間約200件の新規の悪性リンパ腫の診断をしており、全例について毎週血液内科医とのカンファレンスを行っています。造血幹細胞移植に関連する皮膚・消化管GVHDの診断も多数経験できます。

8 骨軟部腫瘍部門

骨軟部腫瘍の頻度は低く、一般病院において十分な経験を積むことは容易ではありません。当院では、多数の院内症例および院外からの豊富なコンサルテーション症例を通して、骨軟部腫瘍の集中的な経験を積むことができます。

9 皮膚腫瘍部門

皮膚病理部門では悪性黒色腫や皮膚付属器腫瘍を集中的に学べます。悪性黒色腫は重要疾患ではあるものの比較的まれであるため市中病院などでは診断する機会が少ないですが、当院では年間200症例以上を経験できます。カンファレンスもあり、臨床的な問題点も理解できます。

10 頭頸部・眼部腫瘍部門

頭頸部ならびに眼部の腫瘍は、唾液腺腫瘍や小児腫瘍などの希少がんも多く含まれます。バリエーションに富む頭頸部腫瘍症例の診断を経験することが可能です。特色として、頭頸科、放射線科との合同カンファレンスを通じ治療方針決定に参画しています。

11 脳腫瘍部門

脳腫瘍の頻度は低く、一般病院において十分な経験を積むことは容易ではありません。当院では、多数の院内症例および院外からのコンサルテーション症例を通して、脳腫瘍の集中的な経験を積むことができます。